

1 派遣期日 令和4年 10月 18日（火） ～ 10月 18日（火）

2 派遣先 学校名（会場名） 埼玉大学教育学部附属小学校
所在地 埼玉県さいたま市浦和区常磐 6-9-44
<http://www.fusho.saitama-u.ac.jp/>

3 研修内容

10月18日、埼玉大学教育学部附属小学校の「第90回小学校教育研究協議会」に参加させていただいた。

埼玉大学教育学部附属小学校では、令和2年度より「学びをつくる」を研究テーマにスタートし、今年度は3年目のまとめの年である。目指す児童の具体的な姿を「進んで問題を見だし、よりよい解決に向けて粘り強くやり抜く子」と定義し、「自覚と自己決定を繰り返すことで学びをつくることができるようにする」という視点を設定し研究を進めている。

研究の構想の発表では、これまでの3年間に研究されてきた歩みや、各学年ブロックにおける指導法改善の取り組みについて話を聞いた。

【低学年ブロック】では、「学びをつくる」姿として、児童が個別に興味関心をもったことを課題と設定し、学び方の基礎を身につけていこうとする姿を挙げていた。自覚と自己決定を促すための工夫として、発達段階を生かした指導を工夫したり、子供の欲求を理解し学習意欲につなげるために問いを工夫したり、子供の思考に沿った自然な学習計画を設定したりしていた。

【中学年ブロック】では、「学びをつくる」姿として、やりたい、やれそうが継続している姿を挙げていた。身についた資質・能力を自己評価する中で、「できなさそう」や「無理」だと感じてしまうことのないように、児童が自発的に学習できるような働きかけを工夫していた。

【高学年ブロック】では、「学びをつくる」姿として、自分事に捉え、学びの価値を見いだす姿を挙げていた。高学年になると学びに対する意欲は個人差がでてくる。また、学習内容が難しいため実生活とのつながりを意識しがたい。そこで、「自覚」と「自己決定」を促すための工夫として、学習内容を自分の未来につなげて考えさせたり、教師がファシリテーターとして子供の学習に関わったり、単元の終末に学習してきたことを価値付けさせたりしていた。どの学年も、子供の側に立って教材研究を行い、「学習意欲を高め持続させるための発問・問いかけの工夫」「自分の未来につなげるための工夫」に焦点をあて、指導法を改善されていた。

提案授業では、国語科の授業を中心に参観させていただいた。その理由は、埼玉大学教育学部附属小学校の国語科の研究テーマである「未来を拓く言語能力を育成する学びのプロセスの構築」に惹かれたからである。児童が「自覚」「自己決定」する際に、言語能力の育成は重要な役割を担う。その言語能力の育成に大きく関わる国語科で、「自覚」と「自己決定」を繰り返しながら、児童の個々の学びにあった「学習プロセス」を構築する指導法とはどのように実践しているのだろうか。本校にも役立てられるものがあるのではないかと考えたからである。

6年生の笠原雅広先生の授業では、単元構成が三次で設定されており、その一次のまとめの授業であった。児童が自分で身につけたい力を選択し、その力を身につけるにはどのような学びのプロセスになるのかを考える授業である。何を調べるのか、発表する方法は何か、誰に向けて、どんな内容でどのくらい発表するのかと全て個々で選択し、友達と相談しながらも自己決定しようとする姿に驚かされた。本校で言うと単元の学習計画を全て自分で設定するということである。児童にはあらかじめ、高学年として「身につけたい指導事項」の情報を与えてあるので、今回の学習活動で、自分の力を「自覚」し「自己決定」しながら学習計画を立てている姿に、3年間研究を続けてきた成果を見ることができた。本単元では言語活動が多岐に渡るため、教師はファシリテーターとしての役割を果たすことが重要であった。笠原先生は、①児童と同じ学習者として児童の活動に寄り添うこと②個と個をつなげ、学びを広げたり深めたりすること③評価者として、児童の活動を価値づけたり軌道修正していったりすることを心がけ

ながら机間巡視し、情報を集め整理されていた。

5年生の波戸内友基先生の授業では、物語教材「たずねびと」の導入の場面であった。授業の導入部分でこれまでの学習経験を振り返らせ、物語文では何を学びどんな解決方法があったのかを全体で共有し、物語教材を通して身につけることのできる力を明確にしていた。教師側から与えられる課題や解決方法ではないので、多くの児童が自分のやりたいことや解決方法を発表していて、「自分たちの読みをつくる」授業とは、このように活気にあふれる授業なのだったと思った。単元のゴール設定では、「読んで考えたことについて共有しながらまとめ、発表しよう」とし、「共有」とは「自分の考えと相手の考えを比べて、違いや共通点を見つけ、自分の考えを広げたり深めたりすること」であると児童に確認していた。ただ発表して終わりにするのではなく、自分の学習内容を自覚し、これまでの学習活動に価値付けをしていこうとする工夫が見られた。

国語科の協議会では、3つの点について協議された。1つ目は、ファシリテーターとしての役割である。埼玉大学教育学部附属小学校では、担任ではなく専科教諭が指導しているため、専門的な力をもつ教諭が多い。そのため、教科部員会で教材研究をしやすい、チームとして指導の統一感もある。ファシリテーターとして共通した指導を行っているため、児童も自分の学びをつくりやすく、埼玉大学教育学部附属小学校が推進する「自由進度学習」をしていけるのであろう。2つ目は、評価方法である。学習者は個々に課題を設定し、身につけたい力も学習方法も多岐に渡っているため、どのように評価しているのかということである。埼玉大学教育学部附属小学校では、2年間にかけてサイクル的に評価をしており、身につけたい力がどれだけ身につけているのかを随時見取っているそうである。評価方法として、毎時間の観察、児童との会話、フォームズを使った定期的な自己評価、言語活動や成果物などが挙げられた。

指導・助言者の埼玉大学教授の飯泉健司先生からは、自分が興味があることを探っていく活動を通して、自分を知り、人を知ることができるとお話があった。「学習は学習者個人に委ねること」、「教師は学習者に寄り添う立場であること」「実生活に生かせる学習をたくさん経験させていくこと」と3つのアドバイスがあった。埼玉県教育局の近藤正紀先生からは、「教師全体がチームとなって同じ指導感を持って指導していくこと」「自由進度学習といってもどこまでを児童に任せるのかその見極めが大切であること」「授業者の視点ではなく、学習者の視点から学びを評価していくこと」とお話があった。

4 感想

本研修を通して、新しい教育方法について考えることができた。私は、これまでの自己研修の中で、教師はファシリテーターとしての役割を担わなくてはならないと学んでいたが、児童と児童をつなぐ「橋渡しとしての役割」しか認識がなかった。教師側が与えた共通の課題と学習計画（いわゆる一斉授業）の中で、効果的な発問や問い返しとは何かを考え指導してきた。高学年ともなれば、単元の導入で身に付けてほしい力を伝え、児童と一緒に単元のめあてを考えたり、学習計画も一緒に考えたりしてきたが、画一的になってしまい、児童にとっては与えられた課題をこなす授業となっていた。児童が自分自身で問いを作り、自分でその解決方法を考え学びを進めていく新しい学習法は、総合的な学習の時間の活動にすぐに取り入れられるし、国語科や音楽科でも参考にして教材研究を進められそうである。児童が、学ぶことが楽しい、学びたいと感じ、積極的に学習できるよう、これからも日々精進していきたい。